大鏡

五

和書門 類
二七九七三號
八七函
七架
八冊

内閣文庫
和書 類
二七九七三號
八冊
一三八函
二架

内閣文庫		
番號	和 27973	
冊數	8(5)	
函號	138	22

国立公文書館
National Archives of Japan

大鏡巻之第五目録

後段 謙徳公 伊尹

後段 忠義公 兼通

恒徳公 為光

仁義公 公季

後段 大入道殿 兼家

已上九條殿息

日本政府図書
明治十三年購求

太政大臣伊尹のおとゝは一条摂政と申き
これ九条殿の一男におはします御集は
くりくとよかけとなのりて摂政になりて大臣になりたまふ
無程にて二年ばかりとやゝくして天禄三年十一月一日に失
給ひにき御年四十九にこそ謙徳公と申き いとさ
くておはしし御子をば九条殿の御遺言とた
がへさせ摂政になりけるとぞ人の申されどいふぞつたふる
でをおもくしかきん御葬送の事をむげに略せり
如きさる世給へりこれそいりていとさはとてまいの
作法よりきこなたは摂政よりとぞこうせさせたまひしものは
志ともさかりしやまでは かつちあるまはるゝ事ほ

わきもすぐれさせ摂政へまゐれば此ほどのこころのくせ
給ひざりけるにこそ、おもしろく見ゆれ和歌なども、そめ
てよく侍りき。書は(つぎ)の佐よりもあらはしてこそ、さるべき女
のもとへ、かよひ給ひけるにも、よみかけ給ひける
くれなゐにてゆきて、おもしろき御こゝろの
とゝのへさしのすゝみうるはしき歌
御返し
おもひとは、いとどつれなき雲井にかくし逢ひしを
ましなかの山のやまとおもひなれえん
あはれの事にかなしうさぶらひてまゐりて、天暦よの
て、御前にて蘭の花ちらしける、御悦にて別の事へ

ま摂政の事
はじめつくはしきひぬらるべきくれたる事
おはりてのちにうへおもひたまひてけり
西門の法おもちろ東三条おもぢにて摂政とま摂政へで世中は
まず法んよりかはぬ事なくありさまとの御かたにまた
摂政ひとく大饗せさせ給ひて寝殿の桜のえだのすこ
しくろきわたれど、織のはらんしつけて、とりくみたち
の国ぐになればすこしあま摂政へまゐりけるが、ぐはいおくれ
きよらにおはしけるが、おりひようへきそうへのかの法家は今世
尊寺そのしぼらう乃氏寺にてまゐれさせ給ふやう
の法の事ばかりにてかく摂政へまゐりてこその紙の

そされて侍るこそむかしにあへなからしておはしけれ
見侍れぐくやう此御さうへと侍らんしをきさて侍年
五十にだにたらでうせ給へるあたらしさは父大臣
にもおとらせ給はずとこそよ人おしみ申してまつり
しか。其御はらからの女君たちあまたおはしき。
女君一人は冷泉院乃御時女御にて花山院母贈皇后
宮と申し按給ひまきの御方くれ女君二人は法住寺大
臣乃北方にてうちつゞきうせ給ひにき。九君は冷泉院乃弾
正宮と申し侍らへずておもしとてもうせなむひ
てのちおほしめしていかにしたるこなひはとめておはしを
めりぞ。又そのきこえ兵衛督乃北方にておはせしが侍

なほ六条左大臣殿乃御子此左大弁乃うへにておはしまし
更御の宮君とこそうは又花山院の御いもうとの君。一宮
はうせ給ひにき。女二君は圓融院乃御時の斎宮にて
按給ひてく天延三年にまいり給ひて貞元二年に圓融
院乃御女御にまいりもし給へりしがほどもなくうちの
焼けにしかば火宮とよの人申しきこえてしまつりき。
さて一二度まいり給ひて後ほどもなくうせ給ひ
またこれ御子は御らんせず按給ひむとて三宮御はけくま
の男君達は代明の親王の御女の腹に前少
将後少将とておはしき。此君は数うせ給ひて
三年ばかりありてなく天延二年甲戌乃としはうさ

おこりそむるおほよそつゐひ給ふとぞ。おかねはおもふに
この世の縁はかねてゆかすべきなくれ給ふしぞかし。一日が
うちに二人の子をうしなひ給へりし。母は方なしにくら
ひとりなりともいとこうかしくうけ給はりし縁
かねは義孝と相なえし。さてはちからおよばでさくおは
しどしお給ふきはめそむる御心若君はなれむしけるが
やまひおもりくなすれはいかにとおもへそうめ
さりくまで母うへまいり給ひき。ゆいごんの表よね
申しめしとどくまいの。やまひやせてきほとけなかいでし
法花経を誦しておはしけるむすめの御かきたまひてけるに
わりはやうくめしとのたまひて方便品と讀

孝甲給ふとくいぶつせ給ひとるぞその遺言は母北方
とはす書給ふべきにおもひとどめものもおぼしでもなく
されしかおりなまんへ人のしきてまつりてかるよやくまた
くりかへしおもとにやまひのやうなるありさまなん
かしてかれどえんへ御給えずなほのちのあらはのちの
母北方はかねて給ひあまなか
志つけりまちさかしてふかちわ川
りへふれわとよきわとそへさやき
とぞしかん給ひそはかへるらしをひくやしきを
おほしさまんおもえそのちかどならくべ賀縁何闍梨と
申僧の夢に君達ゆふぐわたりしま給おほいのあ

おほきいつきのおりへ人さ御よみえ給ふ代ば境女ね
きいとんちよりけるさ御まそ見えし給ひそれど下の陽
楽にもなどさつつちよりけおりくかくしすつ毎うハ君
とうつおかか君よりきいりえしうおひゆし給ふめれ
ときしあまでびいとおさいめさ御の方しおにまそ
川面とはちくされ花うちり御よの人
あそりぬるさこに袖ぬらしすらむ
などうちよみ給ひて又誦じ給けるか

昔契蓬莱宮裏月　今遊極楽界中風

とぞの給ひけるさそのちか殿の女乃さ〇まけ乃おとくれは夢はおも
しろさ花のうけまたりけるをとうつまをくるらひさ
まへりし法師のまそいそかくハいつくにいてつるを
めつししかりやらき御ひそれハ法いつへまは給ひかり
極楽ねよむまれさ

ますあまそあおつりやらりきを御めきぐとさあへ給つはせ
あの人乃法師生徒そえがひや御はよおゝびよのつ〇の君
生れやうようちすくわるすこまそとびよのづつく女房と
かくてひびつかさこしを侍ふかの給ひ女ざり久御よぴゆる
すりおやりかりありまんかうどのよまそらふわ給へ君に
迷ひなくりすめづしくて抱かさわゆめくさ使者くおぬ
歴しくかすりなすぐるとあやしやしあるまんと思ふ
ほどにふかそちのたのよ給ひづつさへかとゆりしうせて人
はけれてまつりく見えそすりくまかまばかお陣よおり
いそ給ひけるがぐつりは花納をいうらじくなうとく
誦しかんとくえのかりまおもえしして世尊寺まおもく

しかしはかなき人はみれども紂のはしめなるまことに
梅みつかんじうはつわれはさかにきれ下をつてせ給ひて
滅罪生善往生極楽といふありがたきむかしそおまして
ひたのせ給ひつりけるはありさはかりけれども
とくあられはきてたてまつる人なしこれあさき
事をそれしりたまふなる所に御ところくだりましまして
はじめよりまいりつるそひとのうらしつ奴アるし
ゑば御きさき出させ給ひてまつりしたまひ御女にかくれと
まうはたまはり月よのかんじうあつてはける種
のいてくたのさはさしぬるされよい不あり御くて御所
けふくぶ子おいのよりあるそりしも此ゆきうりけ

あくてこゝろきこのそでゆるし此御こひなきしよ御
ゑかの女月影よそくいとこそうかんしき数なまひ
しらぎんくさのけうらなんはあそこくてそ御てとは
おもしろしうの御ぞてこいきくは御りんともよ
まゐりそは御うつの世給ひしをかんてそまうりゆる
きびよりあしくそあそれはてそゆるしうは
まうは誠とわざびらりし又家上乃せうそうゆるし
ときさうるのりおさく人ところれんくはかりはうぞ
くめでこうせられ御ひ宮御はおの御めそいそう御
こまなまひそくおろきは御ぞともかかしそ給への給
まさあぐすゑ乃は法しぬきびそれやくまうめあい

ひとつくはしのぐ給ひてはなる中にくらんとはて
まうと人々はいみじうおそれし給ひければその乃
御ありさまをきこえ給へば法皇御心よりおぼしやらせ給ひて梵字檀ぎん法
ずるに此氷精のきこしめしてひさうしてもち
ゐさせ給ひけりのち形見にするものいひてこそおはしまし
しられけれおほけなき一生精進たいしめ給へるがまづおはする
きことをぞいとあはれにおぼしける此御ありさまはおほかれども
見しとみ給へきこえさせ給ふにもさまにきこえ侍りしぞ。
この後はゆくさきは此おぼえさせ給ふ此上なき御人やは
でおはしましけるかくておはしましけるそこに御この御心
しづかにおはしまして日。一条左大臣雅信殿下にまいりて世継

かくはおはせし此御ありさまのいとうるはしうおはしける
てうちまかせ世給へあはしけるはうへはをりくらくとかゝり
まうしゝを法皇給ひしはゝの御ありさまにかゝりて
ゐたまひにたかりしありさまにはありてたゞやされさ
殿給へあはしけるはいとあはれにおぼしまし
しの院のおほかたの給はいとよくかへしききこえの御
のゝありさまのよう給ひしを御えせしとおぼえず
こゝろうがんまありきゝつぞおぼせし其義孝
おほなりく見て源中納言保光の女にこそはおはしけれ
殿給ふ御ことしきぞかし今乃侍従大納言行成卿世の
てかきとのゝしり給ふおほきおとゞの御のこしたる今の

但馬守実経乃子なり。播磨守良経の子二人あり。兼精之
位乃女をうしなひむすひはらのおや行経君又女君ハ入道殿
の御子のみくしげどの乃権中納言殿乃北の方にておはしまし
し。その君十五まてそうせ給ひけりし。又今ハそこの
うへはまつわか君の御ありて侍るなり。又おやひめ君お
はしませしかどその行成大納言にもそひてのちとけとて
まうち地下にはおはせし内蔵人頭まつり給ふ事をもはらと
めでたしときこえしかども源氏の少将ハとにかくにおはしけり
はかなくなりにけるをさまてむかしのよしみの思はれける人
むさしのかみのかたの人なり蔵人頭まで参りて侍りけれ。
かんのとのめのとなる給ひけれど一条院にもまさりて御覚えあれ
うなるべきことゝて世給ひかたきことなり。侍るとかんなを

さるべき人ハなにとはうけせさせ給ひけるを地下のまゝ
にてありとあるべかりけんとの給はせけれどいとやんごと
なき君の御ことに地下なるをおぼしめしてかく頭にな
しゆくこと思ひのほかなりけりとおどろかれけるを
らんよろしくするものゝさるにやうやく人とはなし
しるよしのことなめりけるにいはせんあくまでとききさ
すべておもふところ人もしへはゝのひとつの御事
このきはなる世給はさるんあいさゝしきことなどもうち
はかりてあらせすいまの蔵人頭なりたりける事を
いかなる事も給ひけるしかし思ひしこむりけりとさ
きの殿の挙によりて蔵人頭ハなりけるとこそ侍るらし

なりぬれば蔵人頭より上なるべしなどさたの有
民部卿中納言にておはせし折にしも殿へ申させ給ふ人は
おもひとりてまゐりけり殿へ申すはいづこともしかるべき
しかるを殿へ申けるを聞給ひてそことも殿へ参りて御前の
人殿へそだちなりひろげず有りて皆ふ事なりし奉り
殿へまからむとあるまじき頭よりすこし上へ参りて侍る
なりとおもふばかりの御さまにしもあらはれぬくしてたびたびきこえ
させくだちら殿ひきられぬ帝に思ひつけまゐらせてあり
やがて源民部卿かくやありし殿へまゐりてとおほせられて
殿二位のおもとかくもえぬ殿にしらせとはかくてはかく
にあらずはいかで頭数いで給ふ見えざれやとひやりし

又ともかくもいはで殿より日はむかへ庭にたてゝおはせぬ殿ひしきて民
部卿二位殿おほせしかば此やうなるけらうよりあり殿
にしるべきこと大方けしきばかりいかほどとおもひたまへさをつき
殿へしたれまいらせたそまいるべかりける皆人さだめし
に御おもひとるまでどおきるにはこの中納言と一条摂政とおな
じをりの殿上人にてしなのほどおぼえことの外に一条殿と記
しかしのぞみもおなじさまにおぼしやむごとなくきこえさりけれ
ど頭になるべき次第にさぶらふに又この一条殿さ
ふるまひかへにのぞみかへてしをらしまゐりけるなどこの
おとなり君や殿ひとる御産ぷ夜はをせつ殿いけずきを
人わろく思ひ申べきにあらず。後々にも御心

まゐり給へりげなりのまへはしはしあひまゐらわなくてまかへ
いかんしりかけりなへきこしめしくなんゆるへきとの
せ給ひけん程とや給ひけれはおくれもさわり事なか
りきこえさせ給はんとの給ふ返ひとくらまへしとれ
もいられきるよりにおほしたゆまはける事なりけり
やうてとひことも有くなりけり給ふよかれともくはなれ
なをつへしやらなとひとうしなやよしと思ひまゐらせ給
御かとは御中よりしぬけりそても又給ふ一宿よみあつの
一条殿の法性寺まつる人とも也北の方めよなゆめきて
としくひたりくる殿かいよりしかとたとらりは男子
ともかくりけしはまてまいらせ給とはかくたえ

あはしもそてなかすなれともいりかり給ふときてておやまる
ぬよりしもやしきんとてくまゐりて又よりはかりまのはれや
うれへ給ふ我よりもみをさきとくるつよかりやうてぬこなき
つとたまきりうそなりは給ふものかしそてもりまさて
なりのこくなかんありきかしとおまゐりて六七月乃いとあ
はくなくかなきこゆくとまおさほそくいまやしくと
中門よまちらくまつほとに殿見もさしかへりそてあつ
見えなえくしとは大きになりにらもちこなるも給
ゆへきよたんやうこの殿は我とおほしてろさんとおほ
すみつろあはりれ御くなくもまいりけりける
あとおりけよおもへてあく志んおとろちは大と給ひ

すりよ御よなりける様さてあるべきならねハさくくさをも
よろくそちゐきてたりとおもきをおぼりはりわれん
ひとおこされけるるかりさそてかゝりけりくものぞう
なりくそちえんもしおのこゝをちぎんなここもあわと
をたくしくしてハおもせしおもれといふ命
あらはりまてともうしきんなどちりひくう披給ひなま
なれだぞいくの法あくまてうとこそハなりたまひ
それ道法ませんでこれ度ちとしておんしませは
いとおそそうし。殺乃法義よ南殺此懐乃とのをとがる
形さてへのまのなりけりそよなうよ人の
それいりらぬたまでそとおんまはりなかをのりそよかく

まうれバよくをろんしばおやちうしてたとくとある
そびとうれそくあきるなりけり侍らとつる盛なよ義乃
うちりきをいふおきろろしまきまでど顔んじてあとかくて
はそうら給ふいろいとひ給ひぬれバ頭弁乃まいつら法
たちまち侍りけるなりといふ所てろん給ひとくだところそてを
是大事あなり日なきまはどくまいるりんまひなろるる
きりれとて度まかんし給ひ法る事あるとぞつれやま
ひや有ぶをもして招いて迎たくしてたかりまいら
まよご座りけり八三郎りとかさきくいそきたくまつ
中給へともうらひそくいとるくまいり給ひかけり。諸も
まのこりくやまりしたんまでいのやうよハあしてきる

乃陣よりあからさま清涼殿乃たゞ海よりうつ成まて
殿上までのぼり給へるなり。こはいかに仰せられてさまく
まゐりたるは、さらんせさりけるかゝる儀をあんない給
ようかゝることぞさせ給ひてとゆるしさせ給ひけるは
てくどけくこともうらくいかぞのぼまつるをとく入まさ
せ給ひてくださるおぼろのもの乃とまいらずおはしまけれ
さてそれはいのりあるにし給ひくまゝしけうちへもまゐ
まうでつかまつりしおはしまさせけり乃いへに三条よりまう
西洞院よりまゐりしなりし今は一条殿乃御そうあらしき
まかりしもいらぬとてなたまひし大納言殿よりいかにせう
のひ給へるとてかれかやすくしおくまゐ給ひてりきん

殿上よりしらさきといふ事ぞてうくちけれらら此人
くいかくもおすくすべきなど兼れぐまんらかゝるの
るまなかよこれ大納言殿はものゝ乃さまいかに事なき
いかある事にてとてなのしくの御あとはせりまさるにや
この花をおくりいかにと申しさ給ひみれたんとらかれ
梅をのおくいとらじうおもりしおんむねを申さまくりも
てあしくえたのほとさんさ給へまけるなりし人て
もらひてあとさめ給ひまゝりくすくしかゝぬ事は
を語まましのあらくなりしてらくしくしくし
あし給ひるる御子上りく御いくあさきくおもて
しましてく人くまおもろぎものまのせてまりしてこれ

せられ候はゞさ候はゞしく〳〵あそばしかねたまふとこそきく
していかなる事とかなしとおぼしめしいそぎそくして
まいりあはせ給へるにこれ秘事小松がわりにむしろのとり付
て奉り給へりければおやしろのくちやうやごかなか
まゐりことに琵琶給ひければしばらくとなんやまぬりし
さく御らんじかくしきませけりわくまのまなかとやかき
まさければ南殿にまかりて琵琶をひくまゐりて琵琶ひきならし
ひろきとのゝうちにはさらにとゞまるべきあるまじと
しきつせ給ふ琵琶ひきて声とのこぼれ月ははかんーー
かうじて琵琶給へだいごりのとゞめはさゆられにはまた文
殿上人へくあつめごとこそしてまかりけるとぞいふ人

くはかれり月のまへのことゝしてあるといはれたる月のこうたねならん
きこえ此わか月のりしかんすなりとは連歌もものとしておえを
いそぬかたたとしもなし人のなるべくきゝてぬものや詩や文云
すまいての并海まつりのおあかりけるとなつくなど
とうたえてまのてもすはなりまいのとの夜はわか月のころし
げうりとおもしげまのかたきぎある月のりのこゝろまで思
おのうまおもしらじかみふおもしてのりこまで樂府を
うかいしうきんりのきしては事業をとしめて
きうまめでさくりのきたてまつり給へまたれはうち
の色しくかんずとはらんじてはもおよいまで琵
給ひてはいとなき御寺へつとおもしめしおもはれ

てうあみだいとこハそうぐはうんじけうにさとばかりまく
やさしかりけるものかなとて帝王乃御蔵にをさめ
まゐらすこれやハあるべきおほやけのさきすくのうちまへの人
すがぶや院どのおほくくべむさしある日げんくわんハさあるき
のぜんしあさまさ伏見どうちはしひし一番ははな
めでし二番ははやましなとのひしかどそのおなでを
おぼえ給へる内裏にさありければげんくわんとおしくうちさげ
てまけにあさりけるハそのとうずいじん乃子どて馬のうへ下
のすまあるらんなかげくるをきすちくえんへ給まいに両奈
まさりひやかばそりけ此事をぶかしそこ一るひ給よ
よろこばれたる明理行成と一さうまいりそれ給ひしかど

も一乃大納言ありくいとやんごとなくてさうなき手跡
給ひまぐさりそうさあきの世んしゆうとこくきれ
はげかんうちそこなひくばそうあひさうがしと
なうこいひまつりたるを大納言慶きう跡たまひて
あきまさぶらんかうはゆきなりしあおよつきうり
あしくいてあまりにてそてはしる世給ひゆれバ人々く侍
らじうの給ふせられとげうじ奉りてそのてゝ給
かいむてうめしきむハ又一条摂政乃時おのこども
院の御かうどの御かずらまでよしありける中納言でしき文
えしおおうらの御おふしつくよろずの御かたをおそうじ
うきかやき給ひしかんこと御家せうち跡給ひてくし

かたじけなくてまことにありがたくぞおぼえし花山
までこそのぼりたれ中日とひさしくてぞ法師なども
をひとびとのむかひにもといふことなりてこそありけれ
をひてぞかくれ給へし。その中納言もむかへまゐらせ
せしめとほんだうのしたしくいたるおもふ
しく。花山院の法皇のまつりごとはこの度とこそ
じけ代年へしてさこそあひ給へまでいといとしう
さ給ぞし。この人ども、たがひにかたりの外のあさ
とうしの人々。かの法皇のまつりあり日のくるる
あしきさまにもあるべきにもりて人々まゐりとせん
しくさせ給ふとて。さるほどにおぼしめしまゐらせ

られよそばしあらんなれども、ねりひ給へやけなるよ
ひ人のきんだちはいづく給ひりまゐりおいさ
しあいもまゐれへみつけはいさらぞくひてまゐりてこ
おほせおもし御しきりまゐる。入道殿もまひ人を
ておりしまゐりしまでばたへかなし給はする程
はらへくらけ給へたる。おほかたおりてあ
かよりあらきこまやとおもりかへんどもすまひらしう
けうしせさ給ひくまでたがふかう殿のめなくし
ともさ給はへぞおさこぞれぬかはやりにひさおかさせ
されひさく。教上人どもなの世にそ御らんぜらるるご
まおさまいう人々おりまでそのかへとさへ

せず候給ふべきかとまうしてさゝつひあひ給
御それにはゞにざんべきさまやものかたり入道中納言さし
いそぎ給へりけるよみかごとはれまてゝとおもふさま後
給ひてずちなげにおぼしめしたりがね御ざうしも
とあさましうおぼえまうてまうり給へどもくみかんだ
りせいしきこゑんもわたくしまかれくるにかれば
てんやしけうじやう給ふさ所まゝてありつる御さ
かざさのそのさわうとさみそくの事給ひあはれだるわせてさきつ
がはおりまかしおりとうあけ給へだ事に
なべてさくあはしきさまにはあしめるなりたるをとお
がしめしてぢうじうけうせず候給ひたるとぞ中納言

あさましうもあそれりしをおぼさるにはかしき
事おぼへしはらにはよりしぬるとやしや給ふやも
はかなし源氏宰相もはぞらしはかなきまのくさまる
人も有られたまへりくやはさへそれがいくこうちう
のみ給ふまでいあまりなかまといふ人もありとりぞ
書きしにひさ始めりいみじはいさくもかんでに嘆
流布性乃宰しかへもさ海りかんしさ後給へだ呼
とあるはすぞされば源氏宰相をば冷泉院くるひよりは花山
院のくるひまうすでされきはかるとや給ひぞれば入
道殿はいとゞ始びたりつ事ともまさるてゝをとおぼせ
らまちりつしいとしうまつりつせ給ひたりとあいしち

のゝ中納言乃はゝなりこきさき弁乃すけめきこえられ
たりきぬなとぞけみしういひなきありけなる人々しらく。
今更によろしへさせまゐらせひ給らんなとぞかなくし
りなんと思ひしさ程ふかれたんけにさりとていとくおもはれ
してなやみ給ひけり。されとうれしう給ふめさる
きこえさせしのはれのはかりと人々わりひ申しゝかど。おもひ弁
給へるなはんよはなる性なきてもけしいなくあはとなひ給ても、
う程給へしもかくしてその法はいそきいよよいひむもろ僧
都守禅の君又思あまりよ此君入道中将なやむしつきこゆるを
なりに此三人ハ備中守為雅の女乃むしめありき此中将の
の御母女子定經あしそれしめすていゝ人々とかすめれ。一

衆徒の法をうちあげていつゝ法のみちのみぞうくぞま
ようしますめなる。花山院乃法皇のおほんこなるにみゝうし
なることなんはら給ひし給ひもせずはら給へることをなるされ
たるしまの道よ千里濱といふところにて御心ちそこ
なくはら給へまうて濱ばしよ石にある御枕にて、おほ
しめしこのをるまへとうちおもくなりまさ
りけるよりのけることもそきけふいつにあそれよおぼされ
るんな
そのひ乃よく来るのかさなりてなし
あまみりし火をくらしやみん
なくなれなとなに法孫もいろこしうはなせ給ひて中宮

まのあたり見給へる験なるべし宮はとおぼしけるにおはしまし
ぼしめして御心のうちに念じおはしける所に御屏風の
はしよりひさうげしくはごとくきこえせずやあり
けるをひしくなりていまはかのさ摂政におはしまいつ
けつるにとゞまりものがたりせさせ給ひしにや院の
御護法のひさしう御はしまするとぞあれとおぼ
れなまり給へるに侍るをのづから給へる験も法なりて事
なきていとしきさとをひ人世とゞをいはでうせず
あひたまふ前生の戒力に又國王位とたぐへる
御宿世功徳のさりなきにはあらしてそおはしま
すらめゆくへも清からずはうれしくよし世給へ人なまん

はんにはは懈怠せず摂政すべきうちにはおぼえられけるにいとゞ思
しくなり世給ひし後は人のあやまちをもおぼしとがめの御けし
きをりはあまりめでたき御ことなれば
まづ冷泉院の南の院におはしまし時焼亡ありし
夜はとみにひとつ給へりしかばいたく騒
ぎまふさせらるしの法親の院へは車にてまで二条町尻の
辻にまうで給へりしが院も御馬にてまでおはしまして院に
かくいまうでおりさせ給ひて頭光に奉りてかくいひていよいよ
しまするとは聞えけり人どもにまうでかへりて摂
給へだちてかくなんときこえ給ひしかばおとろきし
まし給へるとおほせける摂政殿ひぬ御馬のあたり

くひあひもいまそくは車乃まへ入り御雑色うちあひせそ
いうじうはさ〳〵しいうねよき殿ばら者ありしさまなる
事やハ侍りしかど又冷泉院乃御車共う
ちよりぎぬやかにしかどうち給ひたし殿ばらひしハ
はさしくけしきおのこともみえさくれとおほしは
しまぽあきの娘比ぬし乃にぬらひゐさまうかやと
の給ひけるはこしかたの人のをさへとわらむ給ひはけま
さて又花山院のひとく殿まつりれうくへさはらんせし
はまりさの乃あまたもみえあてまつりかなんたぱまへ乃日
こといさよ殿ばらへうしうひ乃そこぞうしさ御るかあ
殿もとさぞかうきはあるさこなよしてもあるへき

くいつくしき異様一乃ものどもかうかぶりいせいを
さらじめとして御車乃まへたゞようちひまなくまゐり
しきそくどもいへでたゞろなりおほかりしもはずい
乃いとけうありしかばちいさき柑子とおほくこれ
まふ御数珠ひでぶるまには大柑子をしたる流
ずいとおほくばさしめきまぐしていでゝ殿ばらへ
しゐさ御かんものやいひしおぽくくむしさいの御車
よ貝代はあたくまつりまゐりしおけひかしまゐ
まてきのよらといふしきまりしまうへどもしらて
らのへしといぶぎにりけるもののこれどろ乃権大納言
扇すゞしろきわろくおそし海し殺ぞうし人

はし殿をそむかうく此事ゆゝしくて殿はらひよ
ともに大将殿へまいりかゝりてはべりつひはゝりのど
さくらのさかり風のちりたる様にくだけよもげぬまで
さまぐ\御車をひきかざりまくやうをしかへりの車の
うしろにかへりわおはしましあそびさをすりおいとも
しをかなしけるくおほえはしましけるかさそけ
むかしはさやいとめでたからしせめられ給ひて
太上天皇のはなやかにはおはしまさず殿ばらひきさげ
むつるとはこの御はひこそはあはれ御事もぎ
すなはちあそぶしきをおきてはなゆづまことへの心まの
むなしくゆるまりしけるを殿ばらもまれ

詞花

さくらかなほかの花月をとみてくしたる郷までをと
かしきんあはれなりかはしこの御あはさ御にはしはえ
しよはけるもとをおぼしなさそのうらしけ
さまのさまくまして冷泉院よりもみえにみてまゐりて殿
御返しおはしまし
よの中にふるぞはかなきしら雪のこは
きえつゝもしばしあそびてまゐるなるを
御返し
しら雪のふりけるよにはひとかなしさ
この世をうくおぼしとも思て
おはしけるくおぼしくれさせ給ひと御集にはべるめるをぞ

あそれはゆへまことにされはひとつをいつひさんとお
ほしめしくらへけるにさるほど亀山院は風流者にてそ
おはしましけるまゝ御寝所はくら殿の廊しき浜辺
とよ寝殿たいわたち殿なとははくりあひおもしろき
ませまするもこの院のおいくさ嵯峨へおほしめしたち
らくまてあまりひとひのけさくそ侍し内裏へはほか
てしらわ侍りめれは御車やどりまはいつしきうとおもへる
御かくはしめさぶらふおほきなる流まて嵯峨へ給へる。
面へ出た車のさしれきとはなりしきさせ給へく
そのつゝらいたく兄車もおもしろくおもへどもなし
ひらかでかうしくとへのてつまめぬはなさしいふき
まうけまうそうとだにおしろくおかしめしまするもとそし
れでうしぶをなどのけうしきさてうぷてをいそれ侍るを
まかせたれはえんいでゝ給へてし。御ふね浦浦よせられなと
河ともにおほそくかう給へきよいひまつ蓬莱山てかゝあし
なりきとこうのしくまうす嵯峨へゆきしてうつばそれの
そこのうゝかしつきまいりぬさん浦くちもきなれてさし
やうなるわいとめでたうまへるる又こ立ちははくてせ
給ひしおりはさくてわ親さいすゐるふえふござしまし
こゝくしまそてりのやうなるもゝもみくしらまと
悲しうりとおもんるおんおりしきしそ中門より外より
う亀さ嵯峨へおかなゝめうりもいそうじくおかしようむ

うきとへきかんしゃしきぞ文なぞしこれさまとはい
おのこへありますせ給へてくまば、ありひらけとゆ方
まのうくにかくめしきとえらかけう給やうまさ
きなまゆしなどが見ん給ひしいふりかめでうく侍れ
しうて弐道教かくて馬せて琵琶ひし月はむべ申
う琵琶ひけるまでやりおもしまするのはまはほ
ひかさうかやしすゑるべきままを申あ候ぞ侍り
はけらくもまらうかは車ぬさ道して文まおやうひ
なくまつひしつぱく入はいうまでおきく人か
見しのまだまるそだうわいとのちまはしそあくこう
け給をしかあて防悉おうい

けくありざきくきわのくるまぬはまはいうすくへり
めし琵琶ひておほえさのおがやなどおくしうへまうそ
とあわて琵琶へ申し。あふかくてそふくべりけき。
あまりまきし申車ハいつるくろきぬかとやハ見て
侍る文きらんなのうさ成。おもひて乃ちまうびでくに侍
まそめかくうしてちゞ成れど世ハ目あつみくゆく
しうおぢて御くさ文とく人まうりなしぬ都のう
らはくり侍などか琵琶せ給へ申しがいづまもく
はぞあわろんとのこぽあさまゆうて琵琶ひし一ふ二
のかまかいらんじまする人をやおりしませんん

一

一太政大臣兼通乃おとゞハ右丞相九条殿乃二郎君におはし
ます。のちの摂政とハ申さゝりき。摂政し給ふ事六年。安和
二年正月七日。宰相になり給ひ世給し。閏五月廿一日蔵人頭
をこそはなれしが。天禄三年壬二月廿九日中納言に
なり給ひて大納言をへずして十一月廿七日内大臣
にならせ給ひて。めでたかりしは。おとゝなりとうと
の東三条殿中納言にておはしし時にて。その殿を
宰相よりくはしきことにおはしましけり。
かくなりて摂政し給ひしめでたかりし事なりかし。
天延二年正月七日従二位せさせ給ふ。二月廿八日より
太政大臣なり給ふ。やがて正二位せさせ給ひし
天下執行せさせ給ひて。三月廿六日関白にならせ給ふ。摂政
し給ひしそのかみ。宰相になりて摂政し給ひし年より六
年といひしにこそなりて世を給ひしまゝに。天延三年正月七日
一位せさせ給ひて。貞元二年十一月八日にうせさせ給ふ
させ給ひき。御とし五十三。同廿日贈正一位乃宣旨あり。諡
乃法ハ忠義公と申しき。その殿ハいみじくめでたくおはし
ましけれど。かくて大将にておはしける時は
しばらくおはしましゝやうなれど
こゝろおほきにおはしましてめでたき事なりかし。またおほし
め摂りかはりけるのちなさけハ一条殿がたおほしけ
や。圓融院乃后母后。これおとゞ乃いもうとにおはし

まことやこの后村上の御時康保元年四月廿九日にうせ
給ひにしぞかし其后のいまださぶらひ給ひし時。
この御はらからの御中に関白は次第のまゝにせさせ
給へとかゝせてまいらせてまもりにしてくびにかけ給
ひてとしごろもたまへりける此御ふみよくひまなくおはしましける
ものからせ給ひし御おとゝ此東三条殿は冷泉院の御時の蔵
人頭にて此殿よりさきに三位して中納言にも成
給ひしにあの殿はきこえ宰相にてはおはせ
しかば世中すさまじかりて内にもまいり給は
でいり給ひにしをみかどもおぼしめしてのちに
ふ給ひてあめの一条摂政天禄三年十月廿一日うせ給ひ

めるはこの殿のうちにまいりて御前に給ひしたちけるが
せさせ給はんとおぼしめすなりけりこのふたりのまへにて
御とまりてあるものしとおぼしめすにはおはしましけれ
の中にいとしくおぼしめし給ふのにはかなる事どもはべりけれ
てうら給ひのきさきものなしの御ことすへき事とや給へ
たてまちこの殿給へ参りまいらせ給ひてとのさいそくまいりて候
給へきまでたてまつりてはかんなるさきのことすめやう
一かたのおほとの御まで関白をはきこゆべき人なりし
ゆゑにと人后てたゞいま殿給はとかく殿給へおほせ給へ
ば御まへにかきとあそばせる御ふみおほしめしつぎて御覧じ
きこえてこそやまんはてゝまかでおはしまして御后文などへとかし

ゑいし繁樹ひよりわとこゝろ盛さそてくいで給へおもと
こゝろハきこえ侍りしかばとひりしこゝておぼしけるに
まりてさるべき御せくせさせけやおほじゝ圓融院けるや
うれしく給ゆくおもへし御してたんく文乃はゆひおん
まゐべしとてなしたゞくまつる繁樹へ申けるにとあ
これなりし事なるをもぞの局にわざくぶ此わたくしあらまで
おもしろく御しかくぞよりしけしてあるゝこのおもく
乃し給ふべきりてあまりしまこのみことまでつくあや
まなりこしそはせうし侍りしかは東三条殿もこよおもひ
川どのよりハ上にくらべておほえしまししかじ侍りぬ
じゝうおぼしめしよりまかる事ぞりしこの翁乃

侍ばかりまかりし貞信(ていしん)公此殿にまゐりさぶらひて侍
まのうちへ繁樹まゐらく貫之(つらゆき)ぬしにまめしまかり
よろづきこえてまつりたまひしぞかし
あはれにおもしろく語乃うちにまゐりて歌ハ
このころのすさましげなるわたりざま
ひきのぐ翁にこゝろ合せさす繁樹へ申すや御かへりこと
きこえ侍るまでしかよなじぞおぼえし堀川(かはほりの)
院にすませ給ひしころぞんじゝうて此日乃きんでん
のこうかん乃紅梅(こうばい)さかりにはなさかりたるをみしとてこうち
色まゐらし繁樹つけくに花乃下にたてらし繁樹ひ一枝
をりおりてはらふしにはしてきこえてそうわらふうち

うゐでたき御門あるし日かどはいとめでたくかんじさ
御門ひしぐさの数にはは後じや表よめすなるべし次第に法
ふるまはずぞ今きなうしするきじとぞきおりせさける
まりてまゐりあい座さぞるねだにひよりぞまうけ
くたまわれる数なりとも法のめしのまゝ六位までにに
なてまゐらせ度く表はくいひつのりこれいはれたりされ
たじむつのうちにも抱せかとくとしけるがおやしさ
まくるきまずれなきまでたましくうんしきにあけさく
かん御ならんれはきじのおとりはかゞまゐりとる抱か人ま
いうるやはまことあり事とあさましうてで人の孫に
あはれおりまや被うとありくはよとて为まきし入

て冷泉院の山にたれちきそもとりてかろくもとくたせ
ひきくつそぞいまのしへことを一字もしれちらいたうしう
もしゝのられぞうまもりて我をれつゝ/\おまもらねと
あれは消えししとおんかってまうけるる数生いとめにくう
うれせらす被御つうものなるをどもまゐれいむすおむじやく年
あかまいぞとおく法むもとめ式部の文をなこといぬいなかんどうの
御むすめのたゝしも姫君圓融院乃法府の女御にまいりね
御ひめぶ天延元年七月十一日に薨すせ御中にぐおもひ
川の中に文とやきかんこしまゐらす御にてあうまぎ天延六
年十六月二日に被御ひま方ぎおかなくおもうしゆしかた
どはいうなやけるよりぞまさのはおやの座にもりつ○

よろこびてまつりあそばし殿つぶやきしりたまへば伊
とかしこく又はしろみんなどしそいや〳〵すゝめけめ。
猶まうでいのりをいたしけり。せめて殿ひろくとらい
なりけるに、あるとき女どもを見てわらひとまる
しげまで御むしろをしき申してあまたかれさ殿
むかし御法事すゞき川きざしぬきけしぎいなくもさ
さりつゞおわびくる人わん宮たくなくへくきこにぞ
おはし候し事なかのやうりはとめさ殿へつも
まうや座らくおうかび殿をまいりくにちよくより
物いかさ乾御母をもあむとおもわしかれさわかく
も居けりうきくたてまつりてあるべきことかくのだ。

かくまいりし殿をそまつり殿ひさくいりしやんことなき
くてさうらふ殿ひしとりしいまはひとくちおしき
むかしかたきことなりしかれども殿ゐ申しければ
まおんしまた次六条左大臣殿致もん御子のさねきよを
ゆうへすくおそれするとり。又太政君もあはなし川と
申されし。ぶたちハ乃左大臣と申。長徳二年丙申七月
廿日右大臣になり殿ひてりき。治年七十二にてうせや
おそれし御しらん治安元年五月廿八日そう殿
ひし。これ又年ばかりやなきぬるもん悪霊乃左大臣お
おいとのとす申はまへするいとんうきには右ろうし。
うれ物く思ことなきかくまり侍るなし。これ小まに

むらかみ乃せんていの女御きみこそやさしうこのもしや
すゞろの御はらからぞりしがみ此御はらにはおとこ一人
女二人ぞおはしまし。おとこ君はちゝげんじのおほね
にそへひのみやうそくはよおぼえなかりけて御むら
ひめ君しほどなくよにひさしくおはしまします(はじ)
りけれどもや。出家(しゆつけ)してうせ給ひにき。女君をひ
とつはる。一条院乃御時の承香殿(せうきやうでん)乃女御とておは
しせしかど、院うせ給ひてのちはすゑあひし
の式部卿の宮の御子源宰相頼定(げんさいしやうよりさだ)の君にはなかまで
めのとさかりかなしげなるおんなめでたきぞのおもの乃
御事なども此人ぞことにしめしつけたりけり。其
よ殿乃源附客(すゑとく)にあまりあはく御名たりたちたち
もあへ給はくぐるの御さき給へれよくかゝう君のこゝろ給
まするかゝさる御楽府(がくふ)乃御屏風(びやうぶ)かゝるなとゝうこかゝれさ
まぞこれ大納言よなすやま給へるあるぞ此中の文大まへ女すぐの(よ)
のいとよおぼえありずれ人りしておもしき。又権中将
みちのぶのきさこひろうきわかの上手(じやうず)まさくぺんふくき人よ
ひとられ給ひしかどもたづけ給ひりうさぎ。又女もく今乃右衛
門督(かうじやう)きんのぶ乃やつ。又法住寺(かうじやうど)此僧都(そうづ)のきさこ。おさなゑの君お
くまずぎこと一条摂政家乃御母まします乃むらの女君さ
ちご三位の御おもしゆせし三の御方は来まつさき居
めうへとて尼(あま)よおかまく(おは)しまし次四の御方はいまの

入道殿乃ぞくはおはしましゝおやもの御子ようちそう
せ給ひしきさき君ぞ今の皇后宮よりきてつゝみ参り給ふ上
このおとゞ此はありさまゆくなりあさまし法住寺るぞ
ゆゝしうのめしうなさそてさせ給へるは摂政関白せさせ給
もぬ人の此ためりさこりてそいとまうちなかし。これおとゞ
どいとあんごとなくおはしましかど法素なかそくおぼ
一太政大臣きんすゑのおとゞ。いまの閑院のおとゞに
おはしまします。これ九条殿の十一郎、宮乃御はらにおはし
しまします此子乃女宮そそ宮はよくはかなくなり給ひし
うれしさしては女君一ところおとこ君二ところ。女君

りしずんもおはりひさく侍るぞ御は事はは御さくもて
御やうありていまだ参り給へりしほのくちくなりせ給
ひはしらぞ世中おとゞ人なとして御ゆやまひもなく
て大将もそて給ひてのちこそくちおしかりけれ。はらく
らく藤大納言とゞまりて侍らし。和歌などいとそいは
りしくおはりし中の宮中まで世給ひよまき宮方
は法住寺の御侍此よりぞ此をしてあまたまさきけ此式部卿宮
女の法住寺ひめぎみぞおはせしちはせしけるてり
おとこ君三人女君乃かた〲よくおほくおはせしは花山
院の御時まいり給ひて。二月ばかりうせ給ひにし
御めの盛給ひし。をとめしてげなさかりありけるぞ

まうのおわ給ふうゆもらいまわりかへりけるをまいらせ攝
給ふことなくばかりさふらふにしきてこえたまはゞ
ましりたまひ二月さまつひまゐらせてそれはせさ攝政給
ひめしぐまへとさあはれにかなしうこともやはあり。
はかなさらなものよみれは○おもへずおもしげりすてれ
かしこきくさんたえくまつり給ふちて此大将はせて
とのおんあちいうではおもしろくそのはなをとつたるの
おとこ君こそところ太郎君きみまろとぞ中納言にて
もうひのつよおとゝすゝめかへしおりくおもしれ
給ふめりし二郎三郎君きみまろのりこそ少将などて十
これはおやめしつゝうら攝政給ひてきこえ此きみまろ入道まし

御ちゝのこゝろ今此右京の大まうりこ此関白の大将数
はのちまたこ此君達乃こゝろもしもさりてびのうの大納言
のかずも乃位のう攝給ひましおちぞのうへまかりしお
ひとゝりちなまとこゝろおもしけるさまや。おとゝなるか
事きこえ給つきやしとまですゝ給ひし。じくま
此き給へかしとぞ世人いひしけりてよおはかえをれとも
給ひあしもとりしのう御御かちもいとこうけ
なりしへの猶を君にしるくれたしましかで
姫のにおひかすとそいふれいま少方をまうけて
さまざ給ひめしぞうしこのいまみうる乃法かしこうりしは
女房卅人だのりをかしきぬこせくうんとかへりそう

うきよくぼんさんよし面々にまつらしば。ありさま申けりとも
しじめて中将殿ぐらくまてそしかしづきこそこそゆかしと。
りざりけり。大ねあま君くのくれり給ふ御わたりしも人あま火
あまりかよふごこそまされりの御かさまりくらてぞおほそこ
うちなれたくけるほどぎ御はうぞとびあまつかうそでぞき
せみまてまいり給ふさりとも思ふるに。此ひさげせつらう
とすへくハ御所へ此くすりとなきとなしくまいり給
みだれかなのうらむしろよまさいまそでぞ思ふ殿へまで
はる殿は参りに給てよろれはきくするのしまちる
御女房二三人とりいそぎそで此わたるのごりりもし
つとバあいかさよのしなすでてぞ給させ給ふてまつり

給ふおまえさそるはようハありしりぞおかくるこれしつ
らひありさま。女房此ほどぞくなどはめでたくそれとも
この少将ハ給はいろのきめのまさあれきあまされだかれ
よき二ろどうめうちまそでぞれんしけるに四十余人べ
りなする人のぶ大ねまはおやげりわぞおもしけるに文
くろくてひまいはまことかなごうち河ぞくでもちうけかき
あまるぞおもしけるほどこち此わたりのおもうかき。
まめまあひきよほどぞくとかなしけるまにや。まそく
とれち此ほどさうぞくこそかくちよあかるくみてくれ
はれやりの人せん少方とや面くもかくしおも此名れ
きとの少将思ひけあさし此式アいつ乃文の時文どもらし

のでんの内侍はこの後はしらやむごとなき人々にしたまへ
かたちありさまめでたくおはしましけるまゝかくおほく人々
おほしうつりくさまたまてまつりて桐壺ひとへにおぼ
まひけるきはにこと〴〵くありてしうくるしてつきさし
ゆるまゝ思ひおはしけるまゝや御ぐんてなき人々ぶるま
こゝろかくはおはしましきまゐらせおはしまするかたの
ぶにびたしききこえすることなくおはしまして
人あまたありしごろ女どもうちすてまゐら
らん事おもしろめへきことゞもかりし御ん
ごよきくおもしろ人とゝも御心にはおはしませど
みさまの御かたらが御心より御よしまんやさ

いま小君にはその人々まゐりろくおはしましたれよおほく
もたまはり給ひてちかくおはしましきこえしにかはりや
けうりの事おぼしまめやう給へるへやお御
の籬らがなりたまはら桐壺ひんやうと思ひ給ひて
こゝちおもしく思ひ給ひ御事かはりしかばや
とそおぼし急ぎてしたまひしげあるまさぐりかの人
ぶかりくおはしし御しられたてまつりはなきくの人
まいりあへるまひをせんとかはなきや御さまは
らがりちみとしごろあやしの御ぐりよりある
よ我給ひしすぐして給ひまつるもしらあるかく御
わえ給ひまつまよくなくゝ地まするうらしかく

あまきこえいとおもしろかりしかばはてゝくもゐに
かう意のはけしくへおもしろさんとよくやりひ車そ
むなしくかへられしへ車とやまとておかりきこれけれ
とはらかにうらさりきけれは今小方にあらし給へれ
まいしんくるまそひなとにはうそくものとらする
ゐはさはをのまてりしにさけといふしてのちは殿あ
そそなせりとうしきんさしともはしけるそのけりぬ
まくしける院はまた又いとあやしきはんひなりをや
はくしきうしかひのさらく給はまうれてやまいり
よねてえおもしまさりきよきんそしとやいはく
あさせにけ太ねもはしらへもかさらふるまうへよきくおはしめし

さくおもんせし人をもあはりかにとの　清子大納言卿まゐ
さえいとくきこえしかはむかす先源師房の後あるにき
乃君のはにもなおそしとけり乃皇后宮のみんくしけあ
らてさまつらひ給しへにいまのおは清隆は小方にまうさかへ
りる当はさえのつらかひさしは君そのしまさしや小面乃
中納言とうやよはんへのやしはらきていの心いれ又
右京のうちよくおもんせしはおは右京乃つかんのはなそう
しけまは仁和寺別當律師たんせは君かさりかかある
はをき思ふならめらでのおはくしともへさらきさしのはらそ
たゝしゆへしけはうりすゝ思ひまえれさうへおもんし
まゝきえるに東三條殿とゆへあられしにより御はゝきさ

位などとりまそてまつり給へりしかばいくばくもあらまし
ゆるぎ天道も感ずらしとおぼしめしけんとぞみえおはりの
此門圓融院うせさせ給ひしまゝに東三條殿かくれなげ
きみよしとあがりてしよりかくたてまつり給へりし
うちみかどのゆくへまいらすきゝのとしそおほせられるま
むかしつしばかりとおもひしなげきしそうしたおりけ
なくそていはれらる勝給ひんとして関白殿などは通りとる
うまれてみ給ひとぐろとりを御つかえ給ひしかそよ人
いとりじきひかしくそのほかしけるむかひとくさ
かくひのいふやうに東三條殿のほうきとりくろそて
ら宮給ひしほどのことはおこらりとそてそうけ給へ
なほしこの大きおほぢおやはかの殿のとしころにも
のぼりて給はりしなどいわりいかうまつり侍りしへは殿の
殿にも此あふみきゝ此法師にやとしころのつかさ給の。
なまりまさるにみちのに法師あしくそてすきたま
給ひしあひぶきおほと川殿の御座ますひえとこもくなす
世給ひて今はのけはりしくおそし侍しおとゞよ。
りんじのいとまさにをまことのすゑでこはまへ下
作人さらたまそあたいな将軍東三条の大将殿ま
いら給ひて人のかしられた殿きゝ給ひぬへくいと
こゝろかうかいよりてずしてまうでつかまつ今はかくさるま
まなかさしあれとゆてぞみつ人にまきえすへたにしてもゐ

とておまへなる見くるしき物とりやりおほとのこも
りたる所ひきつくろひなどしていれたてまつらん
とてまち給ふほどにはやくすぎてうちへまいらせ給ひ
ぬと人の申すにいとあさましく心うくて御まへにさふらふ
人々もおこがましく思ふらんおはしたらば関白
などゆづることなど申さんとこそ思ひつるにかゝ
ればこそとしごろなからひよからですぎつれあ
さましくやすからぬ事なりとてかぎりのさまに
てふし給へる人のかきおこせとのたまへば人々あ
やしと思ふほどに車にさうぞくせよ御前もよほ
せとおほせらるれば物のつかせ給へるかうつし心
もなくておほせらるゝかとあやしく見たてまつる
ほどにかうぶりめしよせてさうぞくなどせさせ給
ひてうちへまいらせ給ひて陣のうちはきんだち
にかゝりてたきぐちのぢんのかたより御まへへまいらせ
給ひてこんめいちのさうじのもとにさし出させ給
へるにひるのおましに東三条大将御まへにさふら
ひ給ふほどなりけり此大将殿は堀川殿すでにうせさせ給
ひぬときかせ給ひてうちに関白の事申さんと思
ひ給ひてこの殿の門をとほりてまいりて申し給ふ
ほどに堀川殿のめをつゞらかにさし出て給へ
るにみかども大将もいとあさましくおぼしめ

も大将はうちかへり給へり。さまちておりまのまゝにつかまさ
よおもしぬ。関白殿はまへ入り給ひけり。は
きいとおしまで、さいごの除目おこなひて法の給
へあかまりとて。蔵人頭めして関白には頼忠のおとゞ
東三条殿のおとゞをとりて小一条の済時の中納言
を大将になしきこゆる宣旨くだして東三条殿を
ば治部卿になしきこえていでさせ給ひてほどなく
うせ給ひしおりしも心のまゝにおもせし敷をそ
たゞりかりけれまおもたせしは。猶さきうちよまい
ついて東三条殿うせ給ひし後もあさまし
事なりし。法住寺東三条殿より給はりき。

かゝりつるに堀川殿のごさうかは心ちよくならせ給へと
の給へてあなかしこ。関白は次第ありてこそといふを
おぼしめしける法のりとりの事を申てとり給へる
もさいごにおぼしめしとるとぞしてうせ給へる程も思
ひ給へるかはよくかしこくおはしましける敷也
この兼家の堀川の播殿の御さとおもひさしてまうまう
あきらかにしるしもとけずなりにけるなり

一 太政大臣為光のおとゞは九条殿の九郎君。大臣位にて七年。法住寺（ほうぢうじ）のおとゞと申き。正暦三年六月十六日にうせ給ひにき。法年五十一。のち此御いみな恒徳公（ごうとくこう）と申き。男子おはしき七人。女君二人おはしき。女

二所はとけまさる式部卿宮の御ゆかりとのゝ。いまさ
所も桜殿の御むすめはこれにおはしまし。ほとゝ君
うち奉は母これあつまりくまおもしろきゝ。女君殿
とゝあつかる花山院乃御むすめの女御。いとらうたけれ
おもしせしほどにおぼえ子けしきませ給ひてやつきまく
う殿給ひまさ。今ひとゝころあて入道中納言なんかう
まそうせ給ひしかば男君大将ハ左衛門督さ〇のごとき
あえう殿し。三十八まで。あくなおもしてう殿なひ
ましあやさ御えぷとあさ御し。かゝまし。まぞうし。
人はあしらきりういめかたるるへさのこあう。おもし
むくまされるとはくべきまてるハおやけめ。おはかとも

宰相納言まおはしますなど。数まはへかゝりおはえの左
なかり給へきこえまや。大納言おくきうまぷまれもなまうれなか
むとおぼしくけぞと思ひめし給ひてくびくびろ乃大納言
のぞこやし給ひかごうにや給ふへきさりとききこし給ひ
られむかうてつ殿乃御おまへやすりなりと給まん。やまし
てうくおかせうれきんまへおるとしとおもひとや給ひそ
まだはん将そて去ゝおぼしていとうじうや給はまえとも
しぬかじまや。おぼしなん入道殿これおもしくよそえ
やまされぬることの給ひせけまえん左衛門督乃やしまされがい
かぐいとさかくげまや給ひられてか。此左衛門督きこえ
あらじ。又そこゝまゝずいあと人へしそあなるべかめれ

との給はせられけれども此玄象つねになくなりけるよしくみ
すしかるべきなりとや給へどもなほそらくおもはん
あと人あいりてでうとてありける給ひけしとりふかまれは
むつひてくあるましきよしといはくはうかけるぞ
とおぼしすまぼしとくあくまんもとしてじりくのあしさ
よりてくとはよくうつぶりてつまいみでのまみちまうふ
ほくきまれめるぞとひいりて掘もまつりびう
はうしく給へ舟おでふやまひはさて七月とい上
あう琵琶ひしふぱまがわたびらけるあすびい
おまわはよくてう色よりそとありていぞ給へ里
クれいとしき上でまて我おもせし。この関白殿のひと

宰相う琵琶ひきくしりてぞおきふなゆきくおんしきま
すかしま一へところ是今乃ふ一条院のきさき式部卿の宮と
申しおほじてことりそへてまつり琵琶へ申しほどふ
とうぐう
東宮はよくみく琵琶へ申しとぞ申しきこゆるにおほし
など院ありしなり琵琶ひし娘きこゆる程度乃なんくしげ女
よりうし琵琶えさくほんはかりハかりたま琵琶ひきかう。
いわまし琵琶のまわすなんふしうぞ女御もちくおもく
えいきじうおほかしかげきうしかどふぱはやまひまも
あるほにさくるまやことにはましうじみとしの二月ど
わりしう世給ひまさいてうしきものゝよあわりてちくお
とくなりしてつそしおかまこさ給ふあまま院の女院ま

右衛門のより聞きまゐらせたる撥鐙ならひたり。或人の云はく又
まちおほきこゝろおほく候ふ。又堀川乃摂政殿の御次男
兵部卿あきたゞと申しこの親王乃御世すゑのひとり此君中宮
の御兄とはいひし世ハおほく世次これハ又閑院左大将あき
みつと申しし君はおほきいさゝかなるべしといへど御よはひ
さすがにこそおはしますれどかうもまゐりて御らんじもせし
どうおぼしけるにかふかくめで給ひてやむごとなきこと
かのよそのさまおほくおはしましけれ撥鐙へならひ給ふ。さ
れば此撥鐙ハなほいかゞならひおはしましけるにや
わかきほどよりも撥鐙へならひはべりしかばやみにけり
さきのさいしやうのこまかなるこれハおほかたにやめざく

さて一条院乃御時ハ弘徽殿の女御今はおはしまさず。お
とゝ二人ある三昧僧都源と申しし撥鐙ひとりならひき。さ
一ところハ此おとゝ君ハさらぐ今乃二位済門賛の御なりの
ひまそでおはしするが殿乃御子たちもまのうち陳政のむ
すめ此なりしより女君二所おはしき一人おはしまさぬ大姫
君ハ今乃中宮の権太夫殿乃御北方今一ところ源大
納言としかたの君ことまうし民部卿とかたもその御子のさ
今の頭中将あきたりとの君乃御北方にてぞおはしすめる
おとゝ君もとの御母ちがひ此太政大臣殿がおほ子の中将
ありがたく公成とはおほきてまつり撥鐙へ教へなりし孫人
難くいとおほえたるおほくおはしする君にあるん。この

太政大臣殿乃御ありさま海くなまかんなどきこえされさせつゝ
御前にすゞみのおはしましけるほどの事どもうけ給はり参る。延喜(えんぎ)の
御門乃御女宮(ひめみや)ときこえさせ給ひし。延喜のいとしくおぼしめ
しけるひめ宮にて、まつり御前へまゐりて御ことに御屏風(びやうぶ)
公忠弁(きんたゞのべん)ゆきやまにても、よむべき事の歌ども書きつけ
給ふさまなどあまたのかんなく侍りけるを、くわへ入りてぞ
まぐれのはじめり給ひしかば、さよ。朱雀院(しゆしやくゐん)もしかるべき二代
のみかどの御子とつけ給ひけるに、いとしくおぼしけるも
またうちすぐしてりしはつきたえし海しと九条
殿の女房をとかくしてみえかくれてまゐりて御前へ参りし
ことよのへひとえ事もよかりしかばこそめかしきも

やすらぬやうよおはしめしおもしましけまどい
ろよいぞくらべめでたかりせられさりしよもこの九条殿乃
御おぼえれたびかもおすさふかたちさへいへくらちさ
されさう画ありきをきこしめさるゝほどふあめおぼしろお
とうしをもふかぜならひにめでたし日ざの文うち
またもしまつるよ殿上(てんじやう)乃人々宮文にほ方ままい
まおそろしくおわしめすらんとおぼせらるゝお事
じやうまでもまいらせ給ひつよ。小野宮文乃おもくぞそうしは海
いとをしくハおもくのきこえなさきことは上愛き給ひつれ
のちよこうなかどたがめしおもし御前けめざそ殿
よまりでさ御前さてまつりつく思ひつゞきてそてまつ

ら入道とゆへださうあやまやさうかどふこの太政大
臣ともしこたくまうり給ひくれけうじうものゝあ
ろがそくれば法皇入道ひろれどもまろをはうり
あるまじきおちあんせ執よしかん給へよとわると
君よは〇のふきこえさ入道すられどもまことにさもお
りしまいまりのあらしだがさしれもちなくれやしべきあら
すらしらよあらせ次すぐへさうてうぐ出家しぐあらく
およりあん文書さうぐとんへかへるとの上のあるべき
ままをやうれおまりきりてもはらんせでしくやま入道
ひろう法師まちらく入道りんことはあるまじとや
おりしうしんちゝさき御かしひつりとよろうへり

かくこそは法皇かうしゞかまかざらくまさん志ずさうりけ
むまうしやまうはくはそぼうはすとめらはれさせ給ひ
さまあかとどのあるさもまとて入道つぎりくわざそて法并ト
うせさ入道ひにしまきえだこの太政大臣殿のむすめれ
さ入道へ参日後座りて法忌日まてあそし御かを迎へかそ
いまくすゝ入道ひしは法らんあるゝびごとにハ九条殿へ
おきまさ入道のあねとるあらしぐまことにそのうちハひと
ゝそずそりまくぞややさせ給ひりしどのうこたまさとて
まつる入道へ申し大政殿とば法のゝみ中文さゝあり
よのはよのなうぬ法そう思ひりよれくしませんやかそ
御しなひさまでまつる入道たまりふうはけゆのとおたし

まして人しきをいふもかひなきものゝまゝせき婆
給へとぞ申はは法をよきつゝみ世給ふなりけるりも音ち
の法報をもやうよりしばきうて形しやう世給ふまとね
法もりのめ中す法ぶひ乃年まけだうりぞそ一すおしさせ給ひ
たるむしは思ここちりよおさるく助んしやうまうなん
うらさすさせる婆給ふ事なりけり音給よりて代すゝの老流
ふくて法ふうそ婆給へんおへ年のしき事しきぞ今り
中せどかくてきうひ申て婆給へれど皆べくて九段上人
あじかなのまうの婆給ふかきさなく○どうやうしき助けし
ませ法そのつきつ法たゝつまきなきの事ぞめ見これ／＼
よ御の年まの婆給ひしたまひ小園融院法門あるじおど

のれ乃ごとくとおもひけりやからくおもひなやみ給ひ
さうめの勢給ひてあはれおぼしつゝりて婆
給ひてく又法ね中まで乃頭中将公成君とおくのかたより
の形しかり給ひてくだうもめでも法事れむりより婆給
給ひあなまごおにはまいて婆さまたるにさきえきむかし
もとの君をくまりいて給へん。弓場殿まゐり法さ
きはりまのかく婆給ひそのまゝ中すて婆給へてまや
させ給へてかのてまの御だうの後たらぞおかせられ安所
量寿院乃金堂供養りよ東宮行啓ある法事ときさまつり
婆給ひのくびさみち公成おぼしめ婆と／＼あかじこ
ら行啓せさ婆給ひけなあそれなとのかへりか

しゝとなんおほしとゞめさせてまいりけれと
げさかめいのむすめの中務(なかつかさ)のめのとみりしにはいらざま
うてはやくかざりおろしけり頭中将顕基(あきもと)の君さへ
ほかにはありとかや法師のつぎは中条よりまうしけれ
て太政殿へまうしてめさせ給ひける法師ありしの右衛門督
そいさゝまうらえ給へなりまで乃子の君のなまさ給へいまき
いのうくをむつるぬにぶくわれた、かくらんと右衛門督
きこち升なくまゐんまうし給ひされど御のつゝちく
なさしそはあまたまゝしもさらにあるしと太政大臣殿
の孫ならせけんなほこしそへくまゐりし給へりけれ。これ
なとゑみ給ふにゝ家中にも守位おほ隆国(たかくにの)君へ給へ
をはれしめのぞくそのまゝゆるし給ひけるかたちのこりしこ
ゆふのとこにいまそかりおほしかれすべきむすめ御童名(わらはな)
をさなきみ君とそ申しけり

一 太政大臣兼家(かねいへ)のおとゞは九条殿の三郎君。東三条の
おとゞとおはしましゝ。御母一条摂政(せつしやう)におなじ。冷泉院
円融院(ゑんゆうゐん)の御おぢ。一条院三条院の御おほぢ。東三条女院
贈皇后宮(ぞうくわうごうぐう)の御父。公卿(くぎやう)にて廿年。大臣位十二年。よをし
らせ給ひさること五年ぞおはしましゝ。正暦元年七
月二日うせさせ給ひける。御年六十二。御出家(しゆつけ)せさせ給ひ
てしかへのちは法のこゝろなをしらちよまいりて給ふよ

おさくるまに牛車(ぎつしや)にて少陣まゐくいつし殿上へとなれト
里うちなまめかしき乃殿なしのとおもしろきそいつく
殿上むかうふされどもまゐさそくさありけるまゐひ乃おもて東
そのおもしろせんかたさくれ御衣(ぎよい)ありなかとも
おし盛わりてあわせとりけりりてさかつきを殿上行ひ
けるとしなふにおもしろくひろやかにとさるもさるを盛ぞ
ゐまは少方もおもしろきかなくそれならむとするを
て東三條殿の西對(かしのたい)と清涼殿(せいりやうでん)はなれりとは東つひよわえ
しめくまいらせ給ふるとそおもしろかなるよ人中
めでたしかなしき人とよふる殿上ひめまゐる御果報(くわほう)乃
たよりなき給ひぬるやさかゆる乃みやうしひさしく

なりし殿上をぬともけさめもしめりきぞそのかしく着
とれもかんなきごとをげしこれよりのぞきものおもりしぞと
よ堀川(ほりかは)乃桜殿のとやまの給ひし時よごみの東三条殿ゐ法
はうきともかくぞめ殿まゐさ殿上ひとくいとかしくおそし
し御しし時より人皆よろ此堀川院よりもやと相かく
りんじさ御りしいろかいろふるぞとみまゐでし東三条
よみかおちぬとかんなりよろこび思ひきこえさ殿上へ
おりさまりやおもて殿上などおもしきるもへんと思へ
きどのまをうけまゐでなきそれ給ひとく着とさきふと
い殿上ひかれぞいつうしまさ法着なりどよの中法
この着まうりやまゐくおそれとのゝ人入さらわかつまのるべ

きこえくさうらふなりとやけなるがおくへさゝるゝはうやしし
こゝは文よみてうとまさかんなど侍りきゝうけのたまふ文
の内の殿上人よりて御ゆるしくのこよみをやしらずかし
ちよつゝのみことぞよひとつけてく侍りしに大入道殿
めてりのとこの殿上ひけくふにとうしさくやけま
じさしあさりある事すだにしかさともこれさいよ
こゝかまさばきつおもしめし事かうりごかなも世給はこ
とぶこも乃いざくくるまくろりのちくしは法さらぞく
物すてまつり法皇かし御ゆりせさ勢給ひくはひざにまく
ら殿させ給へぞありのさとてせん侍ぞるまゝ小一条院
てのらくみてしおやまさてざりしをさとりし

ちくゝめしとゝのすみよいうひまさなどの事おりも
ありてずてうしわりて給のきこゆれてありさまなかごの人
法興院(ほうこうゐん)またしま殿下て殿ぞまて給ようぬ心
こうと入るうけやさきまししどいうじうけつ殿
きせ給ひくきてるをいまさくやにて勢給ひくはどかく
う勢給ひもしまさおもしめしまさけりのいろれありま
さて勢給りんとてわたししまてるいくあると法
うしをせさ勢おもし御してぞのそびをこかんまて
法やまひ法さてうせさ殿給へ家ぞしむしやまや乃馬
すり法すいとのをそておくさくちへはかうしてるかおく
のふちろくとみ侍など、おもしきこゆるにおほせし

まて月乃おもしろき夜きけしもせさせ給ひなかめさせ給
ても給ふめるにかくしぬ世乃つらくゝとまいりなるつゝ
まへまいらせたまふ一人くるおはしますらけれど人は此世お
ぼろの様給へくはまくらしかこなたちそちとひさぬ
うせ給ひて月かくるゝとてあけぬるかなしとおもひとは
なかりのくするぞいとひきりもものやうにおきま
らせさら次第おもしかくもあんとおぼせられまたはやく
てまいらんもくしあそびおはしましたちならぬ事どもを給
ひてうわさそて次のふとのでしれまもなしてうく次に
りしはある様給へ本たあらばあのゝおもひ乃次君なき女君よ
ところおもしく君の人へおもしゆしき女二宮おもひとも

ことゝもある程は先かゝる藤原中宮一乃宮申すめり
そうりはおもしゆ次に二条院乃次母の贈皇后よそ女
院大臣二人そうし給の次母つらふおぼしけるかの侍
まつこわりおもしけるに摂政二条乃大殿よりそのゆ
うけるひ給ひくれともしくしく志うさき夕乃
そらく一人様くかたちもくなさけ給ひてやまりはさし
給ふ人ぞなりし様うけるひ給ふこの御事ありとも
おぼさんあるつれそてこのおもひらいかりもひろくさ
くともさらん事様給へしとうちやうけるこそまゐ
やうへ宮へいりあふてさるべきもののきまりしき
てまゐりけるにて侍りける女君一人まき女院の后

乃宮まておはしましておはり乃宣旨つかうまつりき。
又新院乃御方ときこえしはかうなるをなけかせ給ひし
うちはしめし程はさせ給ふ事十一月におはしませし
おはしまさぬのちれことはなけれはなさけ給ひてうちけす
二十にかかりくまつる給ひけれはいとかなしう
くらうてはくらしを十一十二乃かとれいしのとかう
けふ見れはうめてはしめてさくおはしませしあと
とよく三条院此東宮にて御元服せさせ給ふよの
はらうた御まへのくせ給ひくこ三条院を申くかね
をさめはおもしめしかはさはいとあつさなりこ
ら給ふ給へ御よ御おなかひとともに世給ひてそまへ

ましましら給ひてまつるとおもひ給ふくはしけれはし
かるらんのなかにはきこ給ふかとてりし給はせて給ひ
てはらんしあまつへきまてとふかきのころむますて
そもちら給ひさりあまささりしをきはしそであれと
思ひしはおそれさすはかくうし御はしくてそれ
かえりしかとて此院をおほせられたまつおやしき
ことは源宰相定乃きてかよひ給ふとしのいやすて
さとかいそく給ひまさかしのすすめ給ひぬれと
さへ三条院きこ給ひくはの入道殿よさ御事乃
あるはまたしつやあはれとおほせられたまつしへき
かりてかんさくまいらんとておもしかりかれはまい

すゝんおやしをおがりて本丁(きちやう)ひきよせ給ひける
とぶらひ殿給へまいればいとゞかなしさやる
いとうじうけさせ給ひし給へまいれば〇よりをうけて
うたんし給へ東宮(とうぐう)まいりまいりけるまゝまうくおほせ
らまし給まてかんらそてまつりまゐりけるなりぞう
ござふをおもしせんみしかきらしめされ給うんかいせ
あさんなりまでとてはじめ〇とむさあけさせ給ひてち
とひより給へうかゝれどもゐかまはつとえしまかくる
まのうとをかくもの給はせずなげて見まゐせ給ひぬ乃
文まゐりてせ給ひてくまつられびろくまゝてし給ひ
はくありさ海と塔(けい)せす給ふ手へまいりてさすがふれと

ひごろのしうおぼしめしさわりありあへしりのかなしさ
よろこび殿給ひくのちよびや見かしぬはんはなら
らいそうじうなさ給ひそりとぞそのおかりたまてまつ
見ちは家人かへりかへりけれ東宮文まさるこひ給ひし
御じるし宰相(さいしやう)へかへり給ひまいり給ふてるとあまりあるもの
しそれは宮もきこえしめしてたちつきじをしてける
せやむましたき思ひしうと敢おもはれてひとる給
とゆをいうべといはれおそしかるしるにもなせたまり
〳〵とておほせられまいりけるとの仰あやまりしら源宰
相三条院乃御所ニ数よりもしたまひて地下乃かんすち
めすそれはせしはざみは御ところそは数よしおけびぬ

し此別当(べつたう)まさふかなりそうせう給ひあやしかりけるはひとへ
まんはけれ此おほきさきはれいせいゐん乃女御にて三条院
弾正宮(だんじやうのみや)帥宮(そちのみや)乃は母にてぞ三条院はよほうはれたりしは
しゝかとも贈皇后(ぞうくわうごう)と申しき此三人乃宮たちとおほやけに
のこ此おなじ御わたりしよりせ給ひて世のおほんよすこ
し乃おほえいできさかみをおほきおほ井もなげきゝはべん
東宮乃御方ゝりまかり給ひぬはらからのかれじゝそ
まゐらせ給ひなどどもかはれ御ことゝははまゐりしおの御
方にはわが御つかひとぞおはせしまゐり雲林(うんりん)とい
ふ所なる帥の帯(おび)は三条院よりうしろにまでもやう〳〵の給へ
まゐらこのうしは東宮にたてまつりしとかられけるにてんし

て自筆(じひつ)にかゝせ給へるおほいの御そ一品宮(ほんのみや)あとくてそう
はしまされたりし東宮乃御方よりして此みちもたてまつりし
のちくまでおほしわしる帥乃宮のまゐりぬくさ
和泉式部(いづみしきぶ)とあひのり給ひて御らんぜしさまもい
とけうありきやかの御車のくちのすだれを中よりき
らせ給ひてわが御方をばたかうあげさせ給ひ式部
のかたをばおろしてきぬながういださせてくれなゐの
のはかまにあかきしきしのものいみいとひろきつけて。
ぢとひとしうさげられたりしかばいかにぞものみ
よりはそれをこそ人見るめりしか。弾正宮の
まうへはおほしゝ時のはじめこちれのてくしけ

さはさりともさすがにやくとこそはおもほしさせ給ひ
しに。御元服せさせ給ひて此事乃おりにあはせて参らせ給ひし
とや。かの冬ごもりは此る乃すゑになりておはしまして
そ。一家のよのおぼえけやしき参らせ給はざりしかど。さるべき
きことのおりなんどはいつくしうまいりてかしづき申
させ給ひし。帥殿一条院此時乃后宮にまいらせ給ひ
給ひしなどこそは。御おぼえさるべき人おはしくて。いと
こうめでたくてまいらせ給ひて后にたちまひて御母
三条乃いまはせさせ給ひぬるにも。たゞひて併せ
奉へたるにはいはれるれど。この入道殿にかくしか
申させ給ひて。霜間にまいりてはさせさて仕

ぬるさうにてまいらせ給へりしかれども。さはいひながら
給ひて又かれ贈后宮の御ひとつ乃いもうとにおはしける
ひめぎみこそは円融院乃御時中宮女御とまして。一の御
こむまれ給へりき。そのかみに立てて東宮にまいらせ給
ひてのちにはかへり給ひにしかども御母女御どの寛
和二年ひのえいぬ七月五日后にたゝせ給ひて。中宮と
申しき。かの御むすめと一条院とも申しき。母后入道せさせ給
ひて。太上天皇と申して。女院と申しきこえさせて。
一天下をあつかひてまいらせ給ひし。かのち枝
とぶれ太郎乃君。女院乃御せうとにて此道隆乃おとゞは
内大臣にて関白せさせ給ひき。次郎君は陸奥守倫寧

ぬし此女乃むすめにおはしませし君なりみちつなと申て
まゐりて大納言までなりて右大将かけ給へりき。其乃
母君きはめて和哥乃上手におはしましゝかば東
三条殿の我かよはし給ひける程のことども
哥などかきあつめてかげろふ乃日記とあつけてよにのこ
ろ給へりその〳〵おはしまししけるに門を遅
くあけゝればたびたび案内せさせていひいれさせ給ひけるに女君
なげきつゝひとりぬる夜乃あくる間は
いかにひさしきものとかはしる
いとことわりにあはれとおぼしめして
其のちや年〳〵におほく此家あつめぬまれたる乃ためし

おそくあくるはくるしかりけり御返事
されどその後の君ぞこの道綱。懐りしハ東宮傅
まゐり給ひて後は此のとゞやめかしぞとありし
て大将をも申し給ひき。その数今乃入道どのゝ御
政所乃御はらからをすこしそてまつり給ひてしまれ給
まへりし君。峯相中将兼経。少僧都阿闍梨。きはめたる和哥
乃上手におはしましき。又大納言ハ寛仁四年十月十三
日に出家。同十六日にうせ給ひにき。御とし六十六と
ぞきこえさせ給ひし。大入道殿乃御二郎におはしまししかどもの。
又中納言ハ御すゑの此治部卿兵衛督にてよの末ひとの
ためしにもせさせ給ひぬとぞきこえ侍りし。五郎

君子らく今世に入るとものまねをしまする。女院乃法母が常
の法としての君達乃んとしての法ありさぬやうするん。故
宣云元法そんぞうち二年とは世かくさすめ見し〱〱よ
ば三とくはこは三道とやよの人のりきんぞんこうてち首
給ひしまするやし〱つとそわくきし

日本政府図書

国立公文書館
National Archives of Japan